The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

陶淵明「読山海経」詩について

武井満幹

一

『陶淵明集』[1]の巻四に「読山海経（山海経を読む）」と題する十三首の連作詩がある。この詩は陶淵明の連作詩の中では、「飲酒」二十首に次ぐ長さとなっている。だが、「飲酒」詩が陶淵明の文学を語るときにその中心に位置づけられるのに比べて、「読山海経」詩は、それほど高い評価は与えられていなかったように見受けられる。ただ「読山海経」詩の中でも〈其一〉に限って言えば、『文選』にも収められており、評価は高かったものと思われる。この連作詩は、題にはっきりと読後の感を述べたと記されていることから、読書という点から注目すべき作品と言えるのではないだろうか。

陶淵明が読書を好んでいたことは、例えば、隠者としての理想像を書いたと考えられる「五柳先生伝」の中に「好讀書、不求甚解。每有會意、便欣然忘食（書を讀むことを好むも、甚だしくは解することを求めず。意に會する有る毎に、便ち欣然として食を忘る）」とあることからも知ることができる。本を読むことは陶淵明のみに見られる特徴だというわけではないが、その読書の仕方は淵明においては特異であると言うことはできる。淵明の読書の方法や態度は今引いた「五柳先生伝」に言うように、一字一句にとらわれず、自分の意にかなった部分を楽しむというもので、「五柳先生伝」のこの部分は、当時行われていた経書や老荘関係の書物に対する事細かい注釈を意識してのものであると考えられている。[2]

詩人がどんな書物を読んでいたのかは、作品中の語句がどういう書物によって作られているか、つまりどの典籍を出典とする言葉か、を調べればおおよその見当がつけられるであろう。陶淵明の場合もそのような調査によっていくつか候補が上がってくるのであるが、[3]『山海経』を愛読していたことは、「読山海経」という詩題か

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ら容易に知られることである。題には『山海経』を読むとだけ書かれているが、〈其一〉の「周王の傳を汎覧す」という句や〈其二〉以降の詩の内容から『山海経』だけでなく、『穆天子伝』も読んでいることがわかる。『山海経』は、中国古代の地理書で、著者や成立年代はともに不明である。中国の山川絶域やそこに住む奇妙な鳥獣や植物、産物などについて書かれ、神話伝説的要素の多い書物である。また、『穆天子伝』は周の穆王が八駿馬に乗って黄河の源や南方に旅行したことを記した書物で、『山海経』と同じく作者や成立年代は不明で、神話や伝説と結びついた話を多く載せている。

「読山海経」詩は、〈其一〉を除いて一首が『山海経』の本文および郭璞注をふまえた詩句と、それに対する淵明のコメントを記す詩句とから構成されており、それによって『山海経』の中のどういう記事に興味を引かれ、それについてどう考えたのか知ることができる。陶淵明が取り上げた『山海経』の記事は、現実と違う神仙世界を描いた部分と復讐・死・殺人といった殺伐としたものを取り上げた部分の二つに分けられる。前者は、〈其二〉から〈其八〉まで、後者は〈其九〉から〈其十三〉まで、というように詩の配列によってきれいに分けることができる。

この詩については、これまで現実社会と強く結びつけた解釈が行われてきた。それは、この詩は劉裕の晋王室簒奪に憤りを発して書かれたもの、晋宋の王朝交替期の社会を風刺批判したもの、という解釈である。また、劉裕ではなく桓玄が簒奪をして国号を楚としたことを批判しているという解釈もある。[4] このような解釈を成り立たせているのは、この詩の〈其九〉から〈其十三〉が復讐や死や殺人といった殺伐とした内容のものを取り上げており、そのため何らかの寓意が込められているように受け取れるからである。確かに〈其九〉から〈其十三〉までの詩には何か寓意があるような内容になっている。しかし、その寓意が晋宋の交替時期における社会の混乱であったとしても、それは十三首の後半の詩からは窺われるものの、前半の詩からは導き出すのは難しいと思われる。従来も〈其九〉以降の詩ばかりが根拠として提示され、前半部の詩からは寓意が読み取れるのか、あるいは現実批判という観点から見た場合に前半部の詩をどう説明するのか、という点が明らかにされていないようである。そして、前半部と後半部とのつながりを説明するのに、ひまな一時に『山海経』を読んでそこに展開する世界に入っていったが、そこに現実社会の投影を見て現実に引き戻されてしまった、という旨が言われている。[5]

私のこのたびの考察では、「読山海経」詩十三首全体を視野にいれ、これまでとは異なった解釈を試み、この

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

詩の制作年代を推定し、さらにこのような詩を作った陶淵明の心境に論及してみようと思う。

さて、「読山海経」詩十三首を解釈するにあたり、初めにこの詩における第一首の役割について私の考えを述べておく。〈其一〉は十三首の中で〈其二〉以降と句数や内容を異にしているが、読書をする環境と読書が陶淵明にとってどんなものであったかを示すとともに、〈其二〉以降の詩が『山海経』や『穆天子伝』に関係することを示している詩でもある。今まで〈其一〉はこの詩の序的役割を担っていると指摘されているが、その序的役割ということをもう少し重視したい。つまり、〈其一〉によって「読山海経」と題する一連の詩が場面や状況を与えられ、その内容が〈其二〉以降の十二首全部にかかっていっているというように考えたいのである。そうであるならば、淵明は〈其一〉を「俯仰に宇宙を終ふ、樂しからずして復た如何」としめくくり、神仙めいた世界を描いた書物を読むのが彼にとって心底楽しく興味引かれることであると言っているが、そのような気持ちは〈其二〉以降の詩の根底に流れているはずであり、[6]〈其十三〉まで『山海経』や『穆天子伝』を読み、書物の世界をかけめぐる中で何かを感じている陶淵明の姿が思い起こされるべきであろう。そこで、従来言われている現実批判ということにとらわれず、陶淵明は純粋に『山海経』という書物を読んで興味の引かれたことを詩にしたのであり、よって十三首の内容はそういう書物の中でとらえるべきであるという観点に立ち、[7]一首一首の内容と十三首全体の構成を以下に検討してみる。

二

〈其一〉

1 孟夏草木長　　孟夏　草木長じ
2 遶屋樹扶疏　　屋を遶りて樹は扶疏たり
3 衆鳥欣有託　　衆鳥　託する有るを欣び
4 吾亦愛吾廬　　吾も亦た吾が廬を愛す
5 既耕亦已種　　既に耕し亦た已に種う
6 時還讀我書　　時に還りて我が書を讀む
7 窮巷隔深轍　　窮巷　深き轍を隔つるも
8 頗迴故人車[8]　　頗る故人の車を迴らしむ
9 歡言酌春酒　　歡言して春酒を酌み
10 摘我園中蔬　　我が園中の蔬を摘む
11 微雨從東來　　微雨　東從り來り
12 好風與之俱　　好風　之と俱にす
13 汎覽周王傳　　周王の傳を汎覽し
14 流觀山海圖　　山海の圖を流觀す
15 俯仰終宇宙　　俯仰　宇宙を終ふ
16 不樂復何如　　樂しからずして復た何如

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

〈其一〉は、第一句から第六句までに読書をする環境を時節の面から詠み、第七第八句で読書の場である我が家が俗世間と離れたところにあることを言い、第十句から第十二句はここまで述べてきた環境にさらに本を読みやすい状況をつけ加えている。そしてこのような場所で『穆天子伝』や『山海経』を気ままに眺めていることを述べてから、最後に、書物の世界をぐるりと一めぐりすることが本当に楽しいのだと言ってしめくくる。第十四句は「山海経」或いは「山海の書」ではなく、「山海の圖」となっており、書物にふされた図版のようなものを見ていることが窺えるが、[9] 図版だけでなく『山海経』の本文および郭璞の注を読んでいたことは、〈其二〉以降の詩句が明らかにそれらをふまえて作られていることから間違いないであろう。図版は、陶淵明にとって想像力たくましく書物の世界に入っていくのに大いに役立ったと思われる。

〈其二〉

1　玉臺凌霞秀　　玉臺　霞を凌ぎて秀で
2　王母怡妙顔　　王母　妙顔を怡ばす
3　天地共俱生　　天地と共俱に生き
4　不知幾何年　　知らず　幾何の年なるかを
5　靈化無窮已　　靈化　窮まり已むこと無く
6　館宇非一山　　館宇　一山に非ず
7　高酣發新謡　　高酣　新謡を發し
8　寧效俗中言　　寧ぞ俗中の言に效はん

第一句と第六句に西王母の住まいを述べ、第三第四句と第五句に不老や存在の永遠性が詠まれている。このことから、西王母の不思議さ、霊妙さについて関心を寄せていると考えられる。

〈其三〉

1　迢遞槐江嶺　　迢遞たり　槐江の嶺
2　是謂元圃邱　　是れ元圃邱と謂ふ
3　西南望崐墟　　西南　崐墟を望めば
4　光氣難與儔　　光氣　與に儔し難し
5　亭亭明玕照　　亭亭として　明玕　照り
6　落落清瑤流　　落落として　清瑤　流る
7　恨不及周穆　　恨むらくは周穆の
8　託乘一來游　　託乘して一たび來游せしに及ばざるを

第二句の「元圃」は周の穆天子が銘を作って功績と徳行を石に刻みつけた場所であり、第七第八句と考え合わせればこの詩全体が穆天子に寄せる思いで貫かれている

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ことがわかる。また、第三第四句に「槐江」という山から眺められる崑崙山のこと、第五第六句に槐江山の琅玕とそこに流れる川が詠まれており、穆天子だけではなく神仙界の美しい風物にも関心を寄せていると言える。

〈其四〉

1 丹木生何許　丹木　何許にか生ずる
2 乃在崟山陽　乃ち崟山の陽に在り
3 黄花復朱實　黄花にして復た朱實あり
4 食之壽命長　之を食らへば壽命長し
5 白玉凝素液　白玉　素液を凝らし
6 瑾瑜發奇光　瑾瑜　奇光を發す
7 豈伊君子寶　豈に伊れ君子の寶のみならんや
8 見重我軒皇　我が軒皇に重んぜらる

第三第四句に人の寿命を延ばす丹木の実を、第五第六句に美しい玉をそれぞれ詠み、これらは黄帝に重んじられたと言う。ここでは淵明の関心は、長生きと黄帝にある。

〈其五〉

1 翩翩三青鳥　翩翩たる三青鳥
2 毛色奇可憐　毛色　奇にして憐れむべし
3 朝爲王母使　朝に王母の使と爲り
4 暮歸三危山　暮に三危山に歸る
5 我欲因此鳥　我　此の鳥に因りて
6 具向王母言　具に王母に向かひて言はんと欲す
7 在世無所須　世に在りて須ふる所無し
8 惟酒與長年　惟だ酒と長年とのみと

第一句から第四句に三青鳥がどんな鳥なのかを書き、第五句から第八句では西王母の身の回りにいる三青鳥に言葉を託して酒と長生きが欲しいと言っている。この詩では三青鳥のことを詠っているが、そうすることによって間接的に西王母の不思議な力、霊妙な力を期待しているのだと考えられる。そのような力に興味を持ち、願いをかなえてもらいたいものと願っているのであろう。

〈其六〉

1 逍遙蕪皐上　蕪皐の上を逍遙し
2 杳然望扶木　杳然として扶木を望む
3 洪柯百萬尋　洪柯　百萬尋
4 森散覆暘谷　森散として暘谷を覆ふ
5 靈人侍丹池　靈人　丹池に侍し
6 朝朝爲日浴　朝朝　日浴を爲す
7 神景一登天　神景　一たび天に登り
8 何幽不見燭　何の幽か燭らされざらん

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

第二句に扶木、第四句に暘谷、第五句に丹池の霊人（即ち羲和）というように太陽に関係のあるものを取り上げ、関心をみせている。第七第八句では太陽の光を「神景」と表現し、太陽が一度天に上れば、なんでも照らしてしまうと言う。日常いつも見ることのできる太陽が毎日きれいに洗われているのを見て、そういう太陽ならば地上のすみずみまで照らすはずだ、という気持ちなのであると思う。

〈其七〉

1 粲粲三珠樹　　粲粲たり　三珠樹
2 寄生赤水陰　　赤水の陰に寄生す
3 亭亭凌風桂　　亭亭たり　風を凌ぐ桂
4 八幹共成林　　八幹　共に林を成す
5 靈鳳撫雲舞　　靈鳳　雲を撫して舞ひ
6 神鸞調玉音　　神鸞　玉音を調ふ
7 雖非世上寶　　世上の寶に非ずと雖も
8 爰得王母心　　爰に王母の心を得たり

三珠樹・桂の林・霊鳳・神鸞を詠み、神仙世界の美しさに関心を示している。最後にこれらの宝物が西王母のお気に入りであることを述べて西王母への関心をのぞかせている。

〈其八〉

1 自古皆有没　　古自り　皆　没する有り
2 何人得靈長　　何人か得ん　靈長にして
3 不死復不老　　死せず復た老いず
4 萬歲如平常　　萬歲　平常の如くなるを
5 赤泉給我飲　　赤泉もて我が飲を給し
6 員丘足我糧　　員丘もて我が糧を足せば
7 方與三辰游　　方に三辰と游び
8 壽考豈渠央　　壽考　豈に渠かに央きんや

〈其八〉は、長生きを話題にしている。冒頭の句は淵明の別の詩にそっくりそのまま見え、そこでは酒を飲むことによって気持ちを紛らわそうとしている。[16] ここでは死への思いを紛らすために長生きを願って泉の水や木の実を求めているというよりは、そういうものを見た時に人間の永遠のテーマともいえる死の問題に思い至ったのであろう。

ここまでは、『山海経』に描かれる非現実的な世界とその世界の持つ不思議な力に興味をもって詠んでいる。七首中三首に西王母のことにふれられており、関心の多くは西王母に向けられているといっても言い過ぎではないだろう。〈其八〉までの関心がこのようであるのに対

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

して、次の〈其九〉からは興味の対象が変わってくる。

〈其九〉

1 夸父誕宏志　夸父（かほ）　誕宏（たんくわう）の志
2 乃與日競走　乃ち日と競走す
3 俱至虞淵下　俱に虞淵の下に至り
4 似若無勝負　勝負無きが若くに似たり
5 神力既殊妙　神力　既に殊に妙なり
6 傾河焉足有　河を傾くるも焉んぞ有るに足らん
7 餘迹寄鄧林　餘迹（よせき）　鄧林（とうりん）に寄せ
8 功竟在身後　功の竟（お）はるは身後に在り

〈其九〉は太陽と競争をした夸父が詠まれている。夸父が死ぬ間際に投げた杖が鄧林という林になり、それによって後の人人は夸父のことを知る。これは人の名声はその人が死んでから得られるのだということを示しているのであろう。このようなことは書物の世界だけではなく現実の世にも当てはまることであり、その点に陶淵明は関心を示したと思われる。

〈其十〉

1 精衞銜微木　精衞　微木を銜（ふく）み
2 將以塡滄海　將に以て滄海を塡（うづ）めんとす
3 形天舞干戚　形天　干戚を舞はし
4 猛志固常在　猛志　固より常に在り
5 同物既無慮　物に同じきも既に慮る無く
6 化去不復悔　化し去りて復た悔いず
7 徒設在昔心　徒らに在昔の心を設（まう）く
8 良晨詎可待　良晨　詎（なん）ぞ待つべけんや

復讐と抵抗という猛猛しい志を持ったものが二人詠まれている。一人は精衞で、小さな木を口にくわえて、自分をおぼれさせた海をうずめようとしている。もう一人は刑天で、帝に首を切られたが、乳を目としへそを口にして斧と盾を持って抵抗を示している。『山海経』では、両者ともその志がかなえられたかどうかにまではふれられていない。だが、淵明は、志を抱いていてもかなう日は期待できないと詩の最後にあきらめのようなことを言っている。これは、志をかなえるということが、現実の世界では難しく、また淵明自身にも官僚としての志を抱きながらも結局かなえられなかったという経験があったからであると思われる。

〈其十一〉

1 巨猾肆威暴　巨猾（きよくわつ）　威暴を肆（ほしいまま）にし
2 欽鴟違帝旨　欽鴟（きんび）　帝旨に違ふ

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

3　窫窳強能變　　窫窳　強ひて能く變じ
4　祖江遂獨死　　祖江　遂に獨り死す
5　明明上天鑒　　明明たり　上天の鑒
6　爲惡不可履　　惡を爲すこと履すべからず
7　長枯固已劇　　長枯　固より已に劇し
8　鵕鸘豈足恃　　鵕鸘　豈に恃むに足らんや

この詩は、殺した者と殺された者、殺人という罪に対する天帝の罰についての題材を集めた詩である。危危という人が第三句の窫窳を殺し、かせをはめられて山に縛られるという罰を受けた。それに対して、第二句の欽鵶は第四句めの祖江を殺したが、天帝が罰を与える前に鳥に姿を変えて逃げてしまった。第七第八句に「長枯　固より已に劇し、鵕鸘　豈に恃むに足らんや」というように、悪事を行ったものが罪を受けずに姿を変えて逃げても、罰を受ける日が必ず訪れることを言っている。悪事を行ったものが罪を受けないということは、現実の世界でも起こり得ることであり、その点に興味を持って詩にとり上げたものと思われる。

〈其十二〉

1　鵸鵝見城邑①　　鵸鵝　城邑に見はるれば
2　其國有放士　　其の國に放士有り
3　念彼懷王世　　念ふ　彼の懷王の世を
4　當時數來止　　當時　數しば來り止まらん
5　青邱有奇鳥　　青邱に奇鳥有り
6　自言獨見爾　　自ら言ふ　獨り見はるるのみと
7　本爲迷者生　　本　迷者の爲に生ず
8　不以喩君子　　以て君子を喩さず

ここには、不思議な鳥が二羽詠まれる。まず出現すればその国に放逐された士が多いといわれている鳥、次に青邱山の鳥である。青邱山の鳥は名を灌灌と言い、その羽を身につければ惑いがなくなると言われている。放逐された士、迷える人に関連する鳥であることから、容易に戦国の楚の屈原のことに思いをはせることができたと思われる。そのことが『山海経』の世界と現実の世界とを結びつける要因となったであろう。現実世界に、『山海経』の中の鳥が出てくるような事柄が起こっている、ということに陶淵明は興味を示したものと思われる。

〈其十三〉

1　巖巖顯朝市　　巖巖として朝市に顯はる
2　帝者慎用才　　帝者は才を用ふるを慎む
3　何以廢共鯀　　何を以て共鯀を廢す
4　重華爲之來　　重華　之が爲に來る

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

5　仲父獻誠言　　仲父（ちゅうほ）　誠言を獻ずるも
6　姜公乃見猜　　姜公（きょうこう）に乃ち猜（うたが）はる
7　臨没告飢渇　　没するに臨みて飢渇を告ぐるも
8　當復何及哉　　當に復た何ぞ及ぶべけんや

〈其十三〉は共工や鯀が廃されて舜が登用された話、管仲の忠言を聞かなかった桓公が飢えや渇きの中で死んでいった話に基づいている。桓公のことは『山海経』中には見られない記事であるし、冒頭二句に為政者は人材の登用は慎重に行われなければならないという意味のことが書かれているので、『山海経』の世界からはずれるものとして見られやすい。しかし、この詩の全てではないが共工・鯀・舜のことは『山海経』中に記事があるのであるから、この詩も『山海経』という書物の中に置いて考えるべきものと判断する。ただ、共工らの話は例えば『尚書』などにも見られる記事であり、桓公の話も他の書物にみられ、また内容が人材の登用に関するものであることから、〈其十二〉までの詩以上に現実と結びつきやすい内容であると言うことはできる。

〈其九〉から〈其十三〉までは、話の起きている世界は〈其八〉までに詠まれているのと同じであるけれども、そういう世界でも現実の世界と同じような事が起きていることにおもしろさを感じていると考えられる。書物の世界から現実の社会を見ていることになるが、その見方は決して批判的ではなく、あくまでも楽しんだ目で見ているのである。

以上をまとめると、十三首の構成は、まず大きく読書の楽しみを述べる部分と読後感を述べる部分に分けられる。始めの読書の楽しみを述べる部分はこの詩全体の序にあたっている。読後感を述べた部分は、陶淵明がどういう点に興味を持ったかという点から二つに分けることができる。一つは〈其二〉から〈其八〉までの神仙世界の現実離れした不思議な力や美しさに引かれた部分で、言ってみれば非現実的な世界への関心である。もう一つは〈其九〉から〈其十三〉までの非現実的な世界であるにもかかわらず、現実と同じようなことが起こっていることに引かれた部分で、言ってみれば非現実世界に見られる現実性への関心である。

このように陶淵明の興味という点で「読山海経」詩をみれば、従来言われているのとは違った内容の詩である可能性が十分あらわれてくる。陶淵明は書物の中から現実の世界を見る時も批判的に見てはいない。〈其二〉の「寧ぞ俗中の言に效はん」、〈其四〉の「豈に伊れ君子の寶のみならんや」、〈其六〉の「何の幽か燭らされざらん」、〈其八〉の「壽考　豈に渠かに央きんや」、〈其十〉の「良晨　詎ぞ待つべけんや」、〈其十一〉の「鵠鷺　豈

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

に恃むに足らんや」、〈其十三〉の「當に復た何ぞ及ぶべけんや」には同じような調子で反語を用いた表現が見られる。これらは、反語という比較的強い語気のために、特に〈其十〉以降では『山海経』の世界だけにとどまらない淵明の心情の現れととらえられやすい。だが、十三首全体を視野にいれた場合、淵明の激しい心情の現れを示すというよりは、陶淵明が〈其二〉から〈其十三〉まで書物の世界に見られる事柄やそこに起こる事件を眺め、それについての感想を述べているものと感じられる。このことは、淵明が存分に本の世界を楽しんでおり、現実の世界と内容を照らし合わせる時も批判的な視点からは見ていないことの一つの証左となるであろう。

三

次に「読山海経」詩の制作年代について考えてみる。従来は、初めに示したようにこの詩を劉裕の晋王室簒奪に憤って作られたものととらえているため、劉裕が宋を建国した年の翌年か翌翌年の孟夏、つまり永初二、三（西暦四二一、二）年、淵明五十七、八歳に置いている。[12] しかし、今は現実風刺、現実批判ということを中心には考えていないので、劉裕のことは年代を推定する際の根拠にはならない。〈其二〉以降は書物の世界を詠んでいるので、制作の年を推定する鍵は〈其一〉にあると言える。結論から言えば、私はこの詩が隠遁して田園に帰ってきた四十一歳頃から遅くとも五十歳頃までに作られたのではないかと考えている。

〈其一〉の第三第四句では、夏になって草木が茂り鳥たちが巣を作る絶好の場所が与えられた。鳥たちに身を寄せるべき場所があるように、私にもこの廬があるのだと言っている。自分の身を寄せる場所とは、ここでは直接的には自分の家をさしているが、その家のある故郷の田園全体を意識していると考えられる。それはあたかも、わずらわしい世俗から離れて身を落ち着けることのできるこの廬にいるのだ、という口吻のように受け取れる。このように言うのは、役人をしていた頃と対比してそれとは全く違うところにいるのだという気持ちからであろうし、そういう気持ちが強く現れるのは比較的役人をしていた時期に近い頃であると思われる。また、第七第八句では、この廬に訪ねてくる人が少ないことを言う。田園に帰ってきて間もなくの頃の心境を表した「歸園田居（園田の居に歸る）」詩〈其二〉に「野外罕人事、窮巷寡輪鞅（野外　人事罕にして、窮巷　輪鞅寡なし）」という句があり、これに通じるのではないかと思われる。それから、第五句には農作業のことが詠まれている。陶淵明は隠遁生活に言及するときは必ず農耕生活への憧れの気持ちを吐露し、そして実際に農耕そのものを題材にして

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

何篇か詩を作っている。「丙辰歳八月中、於下潠田舎穫（丙辰の歳八月中、下潠の田舎に於て穫す）」という詩[13]もその中の一つである。丙辰の歳とは、義熙十二（西暦四一六）年にあたり、この時淵明五十二歳であった。この詩は実は農耕の楽しみ喜びを積極的に詠じた最後の詩となっている。[14]五十二歳以後に農耕の詩が見られなくなることから、「読山海経」詩〈其一〉の「既に耕し亦た已に種う」という発言が五十二歳より前である可能性はあると考えられる。以上のような理由により、私は、淵明が隠遁をしてからの四十二歳から五十歳頃までの間のいずれかの年に、「読山海経」詩十三首は作られたものと考えるのである。

四

これまでに示してきたように「読山海経」詩は、『山海経』という書物に書かれた記事に対する陶淵明の興味という観点から解釈することが可能である。従来は、〈其八〉と〈其九〉との間で内容が変わることについて、『山海経』の中の記事に現実社会の投影を見て現実に引き戻されてしまったという旨が言われていることについては先に述べた。私のとらえ方では、その内容の転換は陶淵明の興味の対象の違いであり、後半の詩も現実社会に引き戻されたのではなく、『山海経』という書物の中から現実の世界を見ているだけであり、その見方も批判的ではない、ということになるのである。

このように、書物の世界に入ってかけめぐり、そして自由に自分の思いや感想を述べることは、陶淵明にとって楽しみの一つであった。このような読み方ができたのは、「甚だしくは解することを求めざ」る読書方法であったからであろう。隠遁の生活、故郷の田園での生活は憧れていたことであり、願っていたくつろぎの生活の中で好きな読書をするのは淵明にとってこの上ない喜びであったと言える。先に五十二歳を境として農耕の楽しさを詠んだ詩が見られなくなることについてふれたが、農耕に代わるような形で貧窮がよく詠まれるようになる。もちろん、貧窮についての言及は隠遁前の様子を表している詩にもみられるものの、現実に陶淵明の前に立ちはだかる問題として詠まれるのは、五十歳以降に作られたと推定できる作品においてである。恐らく陶淵明には、解放された喜びに満ちあふれ、現実におこる様様な困難や憂いといったものはあまり認識することのなかった時期が、隠遁してからのある時期にあったのではないだろうか。そのような時期に精神を自由に書物の中に飛翔させて作ったのが、この「読山海経」詩十三首であったと考えられる。

「読山海経」詩十三首は、現実社会を批判、風刺した

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

作品ではなく、書物の中に自由に入ってその世界を楽しんでいる様子を示すものである。そしてこの詩は、陶淵明が隠遁生活の初めの頃に、願っていた生活に心からくつろぎを感じ、現実の憂いとか社会的な関心といったこととは距離を置いて見ていたことを窺わせる作品であった。その意味で「読山海経」詩は陶淵明の隠遁生活の始めの十年間における閑居の中での様子を示している資料であると言える。

（注）

①テキストには清の陶澍の『靖節先生集』（一九五六年・文學古籍刊行社）を用いた。また淵明の生卒年は、東晋の哀帝の興寧三（西暦三六五）年から劉宋の文帝の元嘉四（西暦四二七）年で六十三歳で没したとの説に従っている。

②小川環樹氏は「五柳先生伝と方山子伝」（『風と雲―中国文学論集』一九七二年・朝日新聞社）で、（この部分が）「たいへん皮肉な言い方だと私にはひびく。経学・玄学すべての古典の『義疏』類がおびただしく著わされた六朝時代にあって、この発言は、かれの自嘲よりもむしろ驕傲をあらわす。」と述べる。

③沈振奇氏の『陶謝詩之比較』（一九八六年・台湾学生書局）によると、陶淵明が詩を作る際にふまえた書籍で一番多いのは『詩經』、二番目が『莊子』、三番目が『史記』、四番目が『楚辭』、五番目が『論語』であるという。

④逯欽立校注『陶淵明集』（一九八七年・中華書局香港）附録一「關於陶淵明」　五「陶淵明的刺世詩」

⑤例えば、松田稔氏は「陶淵明『読山海經』考」（『國學院高等學校紀要』第十九輯・一九八四年）中で、「閑居の楽しみとして眺め、触発された超俗の仙界への憧憬を（中略）詠み進んだ淵明は、其九以降には、不老不死という個人的願望で済まされない、世俗と同じどろどろとした人物関係の伝承に、閑居の一時、忘れかけていた社会的関心が頭を擡げ、一気に自己主張を含めた感慨に流れ込んでいったように読める。」と述べる。

⑥松田稔氏は前掲論文の中で、「其一の『楽しまずんば復た何如』という心であったのは、其二から其八までの七編であったように感ぜられる。」と述べる。

⑦〈其二〉からの詩句と『山海経』本文との対応については、大矢根文次郎氏『陶淵明研究』（一九六七年・早稲田大学出版会）第六篇作品「読山海経」および松田稔氏前掲論文に詳しいので、ここでは省略する。

⑧「頗迴故人車」について、従来故人が淵明の家にやってくるのか去っていくのか二通りの解釈がある。故人

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

が淵明の家から遠ざかる方向で解釈するのが妥当であること、門脇廣文氏が「陶淵明研究ノートー『讀山海經』第一首〈頗迴故人車〉の解釋についてー」（『東洋研究』第七十二号・一九八四年）、「陶淵明研究ノートー『讀山海經』第一首の詩的世界についてー」（『大東文化大學創立六十周年記念中國學論集』・一九八四年）の中で詳しく論じている。

⑨松田稔氏は前掲論文の中で、郭璞には『山海経図讃』があり、淵明はこれも見ていたと指摘する。

⑩淵明四十五歳の作である「己酉歳、九月九日（己酉の歳、九月九日）」詩に「…從古皆有没、念之中心焦。何以稱我情、濁酒且自陶…（古從り皆没する有り、之を念へば中心焦がる。何を以て我が情に稱へん、濁酒且く自ら陶しまん）」とある。

⑪宋の湯漢の注に「鵃鶬」二字は「鵠鶬」に作るべきことを言う。これは『山海経』で放逐に関係のあるのが「鶬」という鳥であることによる。その意見は妥当であると思われるが、字句は改めなかった。

⑫逯欽立氏の推定では、義熙三年（西暦四〇七）か義熙四年（西暦四〇八）の四月となっている。

⑬「貧居依稼穡、戮力東林隈。不言春作苦、常恐負所懐。司田眷有秋、寄聲與我諧。飢者歡初飽、束帶候鳴雞。揚檝越平湖、汎隨清壑迴。鬱鬱荒山裏、猿聲閑且哀。悲風愛靜夜、林鳥喜晨開。曰余作此來、三四星火積。姿年逝已老、其事未云乖。遙謝荷蓧翁、聊得從君棲。（貧居　稼穡に依る、力を戮す　東林の隈。言はず春作苦しと、常に恐る　懐ふ所に負くを。司田　有秋を眷み、聲を寄せて我と諧ふ。飢ゑたる者　初めて飽くを歡び、束帯して鳴雞を候つ。檝を揚げて平湖を越え、汎として清壑に隨ひて迴る。鬱鬱たり　荒山の裏、猿聲　閑かに且つ哀し。悲風　靜夜を愛し、林鳥　晨開を喜ぶ。曰に　余　此を作してより來、三四　星火積る。姿年　逝くゆく已に老いしも、其の事　未だ云に乖かず。遙かに謝す荷蓧翁、聊か君に從ひて棲むを得たり）」

⑭農耕について全くふれられないというわけではない。晩年の作と考えられている「有會而作（會ること有りて作る）」詩の序にも「舊穀既没、新穀未登。頗爲老農、而値年災（舊穀　既に没き、新穀　未だ登らず。頗る老農と爲るも、而るに年災に値ふ）」とある。しかし農耕の楽しさを詠うものは見られない。五十二歳以降の詩での農耕は、貧窮を招く原因として描かれており、貧を詠ずることに主眼があるものと思われる。私は詩の題材が農耕から貧窮へと移行していることが、陶淵明の隠遁生活における何らかの変化を表していると考えている。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

補本論文中に『山海経』の本文は引用していないが、『山海経』のテキストとして、清の郝懿行の『山海経箋疏』を底本に、清の畢沅の『山海経新校正』、中国の袁珂の『山海経校注』（一九九三年・巴蜀書社）を参照したことをつけ加えておく。

NII-Electronic Library Service